

日野町地域おこし協力隊活動記



日野まちかど感応館の新館が11月24日にブランドオープンし、観光協会が運営する館内の軽食コーナー「にぎり飯・惣菜・みかく」が本格始動しました。私もこのコーナーのメニュー開発や運営のサポートとして携わらせていただいています。日野町で通年食べられる食材といえば「お米」。自然豊かな環境で作られたお米の美味しさを、町を訪れる方にも気軽に食べていただきたいという想いから、にぎり飯がメインのメニューとなりました。また、日野町にも鶏舎のある銘柄鶏「近江鶏」をじっくりと特製のタレに漬け込み、こちら



日野町地域おこし協力隊 瀬川 ゆりさん

町でしか食べられないものをご用意しています。営業は11時から15時ラストオーダーです。

ぜひ、日野町にお住まいの方も地元のを味わいにいらしてください。写真はランチセット(数量限定)600円(税込み)です。イベントや創業を希望される方の出店も新館の計画にあり、日野町の食が集まる場として、賑わいが生まれると思います。



各団体などから隊員へ講演などを依頼される場合は、事前に役場商工観光課までお問い合わせください。隊員の活動は、日野町ホームページでも確認できます。これからも地域で活躍する地域おこし協力隊にご期待ください！

◆問い合わせ先 商工観光課 商工観光担当 ☎0748-52-6562

綿向雑感

— 2018年12月 —
日野町長 藤澤 直広

落ち葉が舞い散る初冬の季節。あわただしい師走を迎えました。年齢を重ねるごとに1年のたつ早さを感じます。

時のたつ早さといえは昭和44年に町内3中学校が統合し日野中学校が創立し50周年を迎えました。昭和43年に日野西中学に入学し翌年日野中学校西校舎になり昭和46年3月西校舎の最後の卒業生になりました。日野西中学校は現在の内池団地であり必佐、南比都佐地区が、日野東中学校は現在の村井四区にあり日野、西大路、鎌掛地区が、日野北中学校は現在の西桜谷公民館にあり東桜谷、西桜谷地区が通学区域でした。一学年のクラス数は概ね10クラス、3学年で1,000人を超えるマンモス校でした。統合校舎が完成したのは昭和46年でそれまでの2年間は、日野中学校東校舎、西校舎、北校舎と呼び別々に通学していました。

中学時代の思い出、音楽の授業でクラスの歌を作ることにな

り、まず歌詞を作り、その歌詞を自由に歌い歌ができました。故菱川先生がメロディを音符に翻訳されたのには驚きました。昼食は弁当で冬は棚に弁当を敷き詰めた「保温庫」にいれ火鉢で温めていただきました。今年から全ての学校・幼稚園等で温かい米飯給食になり子どもたちが喜んで食べてくれています。クラブは陸上部で200mトラック1周、マウンドやサッカーゴールの前を走っていました。練習後、給食で残った牛乳やグランドの下を流れる水路の水を飲んだりしました。

陸上部では「足が痛い」と訴えても「走ったら直る」と「無視」され聞き入れられませんでした。雨が降り校舎の2階木造廊下をバンバン走り先生から怒られ「どおせこの校舎は解体されるのだから」と「反論」したら「最後まで良い環境で学ばせたい」とたしなめられたこともありました。現校舎が竣工し10年になります。より良い環境で子供たちが学んで欲しいという町民の皆さんの思いが込められています。日野の子供たちの健やかな育ちをみんなで応援しましょう。

温故知新

日野歴史探訪

私たちの住む日野町には、52の大字があり、それぞれの地域が豊かな自然と歴史文化でいろどられています。

温故知新では、町内各大字の歴史と代表的な文化財をシリーズで紹介していきます。

上迫

日野町の西南に位置し、水口丘陵の谷筋にあたる大字迫は、中央部を日野川支流の迫谷川が貫流しています。迫という地名は、こうした山と山に挟まれた地形に由来するとされます。

上迫は、この地域の南部にあたり、北は下迫、南は甲賀郡と接します。また、迫谷川に沿って甲賀市水口町今郷の駒場付近から迫を経て清田へと至る「迫谷道」が縦走しています。この道は、甲賀郡と蒲生郡を結ぶ要路であり、地区の南端には時の古語である「たわ」に由来すると考えられる「大田和」という小字が残っています。

古代の上迫

水口丘陵には、奈良時代から平安時代にかけて、須恵器や瓦を焼く窯が造られました。上迫にも9世紀

に大田和で生産が行われ、過去に須恵器や窯の破片が採集されています（大田和窯跡）。

中世、交通の要地

上迫地区の北部、字菅蒲谷を挟んだ南北2箇所丘陵上には、「上迫城跡」と称される中世の城跡が残っています。集落背後の丘陵上に同様の形状・配置で城郭を構築する手法は、伊賀・甲賀地域の特徴の一つですが、日野町一帯では上迫城で見られませんが、甲賀郡と日野を結ぶ道沿いに複数の城郭が設けられたのが迫谷道のみであったことも、この地が交通の要地であったことを示しています。

儀俄氏の拠点

上迫城に関する当時の記録は確認されていませんが、儀俄氏の城という伝承が残ります。

儀俄氏は藤原五郎俊光（満）を祖とし、俊光は蒲生姓を名乗ることが記録に残っています。弘安6年（1283）には、俊光の子と考えられる藤原泰俊から嫡男亀若へ「先祖相伝の所領名田等」が譲られており、そこには最も広い「迫」や必

佐郷など蒲生上郡の他に、「甲賀上郡儀俄庄下司職、同名田・名畠・屋敷・山野・所従等」と記されています（蒲生文書）。この記録から、所領は蒲生、甲賀の両郡に存在し、その本拠は迫であったと考えられます。その後、建武元年（1334）頃、頼秀の代には「儀俄」を名乗っていることから、本拠を儀俄荘へ移したと思われる。

やがて儀俄氏は、近江守護六角氏の下で勢力を伸ばし、明徳3年（1392）には、守護代に任じられるほどになりました。この直前、至徳2年（1385）の記録によると、儀俄氏の所領は、儀俄荘、迫村、麻生荘、日野牧、奥津保、山本保、



上迫城跡近景（北部の丘陵に残る遺構）

狛月、上野田などで、迫も引き続き支配されていることがわかります。儀俄氏に関する記録は応永15年（1408）頃から一時確認できなくなりますが、永祿9年（1566）には、「往古より儀俄先祖に宛て行う処」であることを根拠に、儀俄秀連の「迫上下の郷地頭職ならびに關所検断神社山内」の知行が認められており（蒲生文書）、儀俄氏と迫地域の関わりが改めて確認できます。また、当時、甲賀郡水口を本拠とした美濃部氏の室として、蒲生氏から「比佐女」という人物が嫁ぎ、北内貴城に住んだといわれます。伝承の域を出ませんが、甲賀武士と蒲生氏の深いかかわりの一端が垣間見えると同時に、その連絡路の南端にあたる上迫の重要性がわかるエピソードです。